



Title	修学困難な学生の理解に向けて
Author(s)	武中, 美佳子
Citation	大阪大学ファカルティ・ディベロップメント (FD) フォーラム報告書. 2016, 27, p. 157-167
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56632
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

研修 E-1

「修学困難な学生の理解に向けて」

配付資料

修学困難な学生の理解に向けて

2015年度 大阪大学FD研修
『学生指導に悩みを抱える教員のための事例検討会』
大阪大学キャンパスライフ支援センター
武中美佳子

修学困難な学生の理解に向けて

2015年度 大阪大学FD研修
『学生指導に悩みを抱える教員のための事例検討会』
大阪大学キャンパスライフ支援センター
望月直人

本日の内容

- 修学困難な学生の背景(10分)
- 事例検討(35分)
- グループ発表(10分)

修学困難な学生とは？

対応困難な学生とは？

●就学困難な学生

- ・授業についていけない。
- ・テストで点数が取れない。単位が取れない。
- ・指導しても、その通りできない。
- ・連絡しても、返事がない。連絡がつかない。
- ・研究室(ゼミ)でコミュニケーションが取れない。
- ・研究が進められない。

⇒何を考えているかわからない。

⇒大阪大学の大学生・院生としてやっていけるのか？

エスカレートすると・・・

●学力不振

●友人・教員とのトラブル

●不登校・留年・退学

●薬物・違法行為

対応困難な学生とは？

対応困難な学生



困った学生ではなく困っている学生



何に困っているのか？
背景に何があるのか？
修学だけでなく生活面では？

このイメージを持つことが大切

背景に想定される要因

- 本人の特性・能力
- 友人関係
- 家族関係
- 突発的な環境の変化

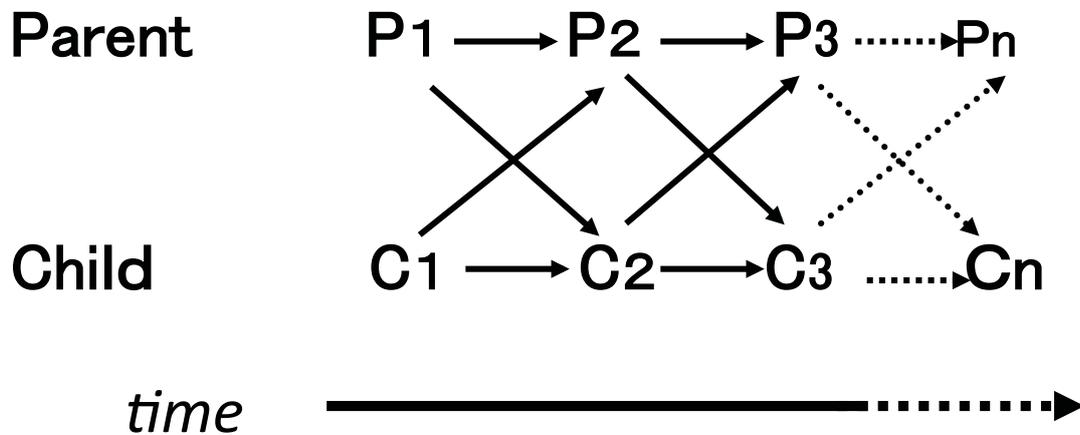
本人

環境

相互に影響

要因は複雑に絡み合うのが当たり前

現れる行動 ↔ 発達歴の積み重ね



発達とは...

→子どものみや、親・環境だけが原因となるわけではなく、親・環境と子どもが相互に影響を与えながら発達していく。

これまでの発達歴の重要性

●それまでの発達歴・生活歴の確認

・これまでの家庭生活や学校生活の詳細

→できる範囲で、入学時に確認する

→気になる学生が見つかった時に、確認する

発達的な視点を必ず持つこと

架空の事例例から 考えてみよう

事例検討にあたっての期待

- 困っている学生の背景への理解を高める。
- 困っている学生への支援の方向性が少し見えるようになる。
- きちんとした対応策が出てこなくても、何とかかなりそうといった気持ちを持てるようになる。
- 対応がうまくいかなかった時のこちらの気持ちの整え方を知る。
⇒自分とは相性が悪かった、他に救ってくれる(べき)人がいるだろう
⇒本当に解決が必要という時期ではなかったかもしれない
- 自分一人だけで対応しようとせずに、他の教職員、他部局と一緒に連携して支援することが、結局うまくいくだろうという気持ちを持てるようになる。

架空事例

本人も大学も発達障害と知らされていない新入生Aくん

- 5月の連休明け、保護者から連絡があり、「息子が勉強についていけないのか2週間全く登校していない、小学入学前に、発達障害と診断されている」と言う。
- 告知はしておらず、本人は発達障害という言葉すら知らない。
- 大学にも知らせていない。
- 本人の話をきくと、
勉強が難しい、授業中先生に質問しても素っ気ない対応をされる、
授業がつまっているので、授業後質問する時間はないし、
そもそも先生がどこにいるのかわからない、きちんと教えてほしいという。
- 理解のある先生が授業内容を教えてくださることになり、日時を設定するが、何度も無断欠席。
- そのうち試験期間に入ったが、試験日程も把握できていない。
- 本人は体力的にも限界で、気力も低下、このままでは単位を落としてしまうという不安にかられている。
「どうせ単位を落とすなら試験は受けない」「留年になるなら自殺する」
- 保護者は、大学側で試験日程やレポート課題・締切を把握し、本人に知らせてほしいという。
「先生方がこの子のペースに合わせて教えてくれればできると思う」「高校までは先生がうまくやってくれ、問題はなかった」

架空事例

体調不良で研究室にいけなくなったBさん

- 他大学から入学。下宿生。
- 今まで指導教官の指示に忠実に従ってきた。
雑用を頼まれることも多く、自分の研究がすすまず、徹夜が何日も続くことがあるが、
「研究は体力も大事、そんなことでは将来やっていけない」と言われる、がんばってきた。
- 指導教官に研究方針を相談するとOKと言われるが、その後、研究室内のミーティングでは、教授から全くダメだと言われる。OKを出していた指導教官も教授の意見に頷いている。信用できない。
- 「何を研究しているのか、どう繋がるのか、イメージできない。先生もわかっていないのだと思う」
- 調べものや、作業に集中するため図書館を利用しているだけなのに、研究室にいる時間が少ないからか、「サボっているから遅いんだ、真面目にやれ、こんなことでは卒業もさせられない」と怒られる。
- 体力的にも精神的にも疲れてしまい、研究室を1週間休んでしまった。
- 怒られることが怖くて連絡ができない。
- 学生相談室を利用し、カウンセラーから先生に連絡をとってもらうことも考えたが、弱い人間というレッテルを貼られることが嫌、どうせ理解してくれないと思う。
- 研究室のことを考えたり、行こうとすると胃痛、吐き気などが生じて行けない。研究室も変更したい。

基本的対応のコツ①

●発達障害・精神障害傾向を学生が有すると感じたら・・・

①視覚情報を用いる

・口頭だけでなく、メモをしながら話をする。個別指示の徹底。

・メールのやり取りも有効

⇒視覚的理解の高さ

⇒やりとりをしたという物理的な証

・言葉でのやり取りでは、簡潔明瞭、具体的に伝えること。

⇒5W1Hを明確に！

・見通しを伝える

基本的な対応のコツ②

②できるだけ肯定的な声掛けで接する、ほめる

・ネガティブなメッセージに過敏なところがあるため

⇒「～ができなかったら、一できないよ」・・・×

⇒「～できると一できるし、よいと思うよ」

③感覚過敏性への対応

・聴覚, 視覚, 触覚, 温度や湿度など

⇒大きな・強い声を叱責されたと受け取ることがある(聴覚)

⇒いろいろと目に入る環境だと集中が困難(視覚)

★刺激の少ない落ち着いた環境の用意

基本的対応のコツ③

④相手を尊重する

・独特なふるまい，独特な考え方をしているも，周囲に迷惑を掛けない限りは，本人のやり方を尊重する

⇒教員側の枠組みに合わせる事が苦手なことが多い。

⇒相手のやり方でうまくいくなら，それを認める

⑤一人だけで抱え込まずに対応する

・トラブルが多い場合は，教員が一人で対応するのではなく，学内リソースをどんどん利用すること

トラブル対応の基本(対応のコツの応用)

①本人の話を傾聴する:信頼関係，よき相談相手

②問題の把握と助言:メモで整理しながら話す。図式化も有効

③トラブルの原因やどこが問題だったのかを，本人に分かるように説明する。

④枠組みを示して，解決できる部分，解決できない部分を明確化。対応方法を一緒に考え，学生ができるところは学生に実行してもらう。

⑤部局の何でも相談室，キャンパスライフ支援センターや学生相談室など，学内リソースへつなぐ。

↑
部局での対応

↓
学内資源の活用

ご清聴ありがとうございました